

経済学 事始

三上隆三 著

*An
Alphabetical Index
of
the Names of Authors
of
Commercial Books & Pamphlets*

29 Nov. 1764

*It contains all the Real, Surname, & Initial Letters of the Names of those Authors
Books or Pamphlets were entered in my fair Chronological Index on the 29 Nov. 1764
their Names, Initial Letters &c printed on their respective Books or Pamphlets: &c
Names of the Authors of such anonymous Books or Pamphlets as I have been
asked by the same being written on Copies thereof bought by me, or by others for*

2 Dec. 1764

経済学 事始

三上隆三 著

東洋経済新報社

著者紹介

1926年生まれ

1948年東京商科大学卒業

現職 和歌山大学経済学部教授

著書 『ケインズ経済学の構造』(有斐閣, 1956年)

『貨幣的経済理論の研究』(有斐閣, 1960年)

『近代利子論の成立』(未来社, 1969年)

『円の誕生』(東洋経済新報社, 1975年)

現住所 京都市下京区綾小路通新町西入

経済学事始

定価 1800 円

昭和57年11月18日 発行

著者 み かみりゆうぞう 三上隆三

発行者 佐野佳雄

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社

郵便番号 103 電話03(270)4111(大代表) 振替口座東京3-6518

© 1982 <検印省略> 落丁・乱丁本はお取替えいたします。
Printed in Japan

3033-2806-5214

気軽にそして楽しくよめる経済学に関するいろいろの話題、これが本書を形成する内容である。それらのものは経済学にとって重要な意義をもつものでありながらも、ともすれば見落されたり軽視ないしは無視されてしまいがちな、いわば経済学そのものをめぐる興味ぶかい話題である。そのもつ意義にもかかわらず、いわゆる「経済学原理」「経済学原論」「経済学概論」といった固いタイトルをもつ書物や教科書には、減多に顔を出さないであろうような人間味あふれる経済学的談柄である。題して『経済学事始』という——杉田玄白に敬意を表しつつ。

筆者が経済学にかかわりをもってから今日まで、その難かしさには随分となかされてきた。しかし経済学という学問は難解さをもって看板・専売特許とするものではない。研究の過程で実に興味ぶかい話に出会ってもきた。四角四面の威厳にみちた経済学の外面にもかかわらず、そのよそゆきの顔の内側には、人生の機微にふれるもの、思わず手をにぎるような痛快至極なこと、腹をかかえて笑いころげるような事柄といったものが意外に沢山あることを知った。経済学が哲学・宗教・法学・倫理学などとならぶ、人生の根本問題・根本法則にふれる学問であるのみならず、社会科学とよばれる諸学問のなかにあっても、人間生活そのものに最も密着したものであるから、これは決して不思議なことではなく、むしろ当然すぎること

である。

経済学の主役は人間そのものであり、その人間の行動・活躍が経済学の対象となる。そのような人間の一生が波瀾万丈にとむものである以上、当然ながら経済学は最も人間臭にとみ、人間の生きざまとしての緊張関係・一般大衆の熱気にみちあふれたもの、親しみやすいものであるべきはずである。学問の発達・発展とは人間のにおい・熱気が消え去り、人間の姿・影そのものまでも薄くなることだといわんばかりに、色ぬき・アクぬき・油ぬきよろしく、具体的実際的な人間的社会的なものを捨象し、あとに残ったものはひからびた繊維質・筋のみでゴザァーイ！ とばかりに数式がところ狭しと全面的に展開され、読者に数式・数学アレルギーをおこさせ、無味乾燥で難解以外のなにものでもなく、とりつくしまもないといったことは、他の学問はいざしらず、こと経済学についてはありえないはず。経済学のなかには、熱い血潮の流れている、そして極めて貪欲で悩み多き人間が主役として活躍しているのだということを証明することも本書のもつひとつの目的である。このような小著に、上は帝王から下は詐欺師・泥棒のたぐいまで、ともかくあわせて450にも達する人名の登場する所以である。

経済学の研究をすすめる折に見聞したこと、とくに手にした文献や読みちらした雑誌論文のなかで遭遇した愉快で興味ぶかい事実・事件・逸話等を、筆者はこまめに採取してきた。これらはいわば経済学の本道をあゆむ過程でのひろいもの、摘みとった草花とでもいうべきもので、経済学余話とも表現しうるものである。筆者に名講義をきかせてくれた数々の恩師の故智にならい、経済学の難しいエッセンスを講義する場合、それに対する学生の興味を喚起しその理

解を容易にすべく、筆者は加工材料として採取してきたそれらを活用している。したがってそれらの効果については実証済みである。

本書に収録したものは、上記のように採取したもののなかからえらんで、昭和54（1979）年4月から1年間にわたって『経済セミナー』誌に執筆したものである。同誌に連載中、ナポレオンの『「諸国民の富」研究ノート』に関連して神野寺に言及した「経済学書の4大コレクション」（本書第12章）の発表時に、たまたま同寺の飼育していた虎2頭が檻から逃げ出し、付近の住民を恐怖のドン底にひきずりこむという突発事件がおこり、その偶然の一致に同誌編集者から驚きの書簡を頂戴したことどもが思いだされる。ところでそれらの諸話題を同誌にのせるにあたり、その総括題として、当初は「経済学外論」——外論の外は有名な『日本外史』（頼山陽）の外と同意のものであり、またそのガイを概論のガイとかけることによって諸論稿の内容・性格を示そうとも試みた。同じ意図にもとづきながらも最終的にはインテルメッツォ INTERMEZZO と称することにした。いうところのインテルメッツォとは、ご承知のように、芝居の幕間とか主題曲のあいだに奏でられるもの——間奏曲のことであって、これによって同誌にならぶ難解な論文の間にあって、気分転換に役立てながらも経済学の増進にも活用してもらおうとの気持を託し表明しようとした。世にいう経済学閑話・夜話であろう。これらの話題を本書に収録するにあたっては大幅に添削をほどこした。しかしその基本的性格すなわちそれらの内容が気軽に面白く読んでもらえるものであるという点においてはいささかの変更もない。経済学そのものと関連づけて本書を読んでもらえれば、経済学そのものが他人行儀的な仮面をとって、より身近かなものとなり、

経済学への意欲・理解が倍加するはずのものである。

筆尻になってしまったが、本書の上梓を引受けられた東洋経済新報社ならびに編集——図版の配置にまできめこまかい労をとられた同社の中川真一郎氏に謝意を表したい。

昭和57年10月上浣

洛中綾小路にて

三 上 隆 三

はしがき

1	ポリティカル・エコノミー—————	1
	名前というもの	2
	命名の苦心	4
	ポリティカル・エコノミーの出現	6
	フランスとイギリス	9
	ポリティカル・エコノミーとエコノミックス	14
2	経済学という名称—————	17
	舶来の科学	18
	中国の翻訳術	19
	日本製学名	23
	経済の換骨奪胎	26
	政治経済学	30
3	経済学創世記—————	33
	揺籃期経済学の特徴	34
	匿名書の氾濫	37
	偏見との戦い	42
	経済学公認への道程	46

4 『諸国民の富』のA	51
論争の発端	52
黙殺と反撃	55
誤訳はどちら	58
翻訳とは	60
“A”論争の意義	61
5 人間としての経済学者	65
有名人の人間的欠陥	66
学歴・学位追求	70
恒産なくば	73
人生の達人アダム・スミス	76
6 文豪と経済学	79
文学者と経済学	80
D. デイフォーの場合	84
J. C. F. シラーの場合	87
W. シェクスピアの場合	90
文豪経済学者創造の落とし穴	93

7	マルクスによせて	97
	大英博物館案内	98
	マルクスの読書・研究	102
	蔵書の管理	105
	マルクスとロンドン	108
8	Keynes 論争	113
	なんと読めばよいか	114
	多数派キーンズ	116
	本人自身による論争決着	118
	なお残るケース	121
	人名読み方の正しさ	124
9	金 と 銀	129
	常識の限界	130
	金銀の価値関係	133
	日本の金と銀	136
	金銀をめぐる日本と中国	139
	金銀両本位制と日本	142

10 皇朝銭のロマン————— 147

皇朝十二銭 148

律令国家と鑄銭 149

忘却された貨幣の古代的用法 152

金銭と銀銭 155

金銀と古代国家 158

11 ポンド・ドル・円————— 165

ポンド・マークの由来 166

ドル・マークの由来 170

なぜ円が YEN なのか 173

ケンペル『日本誌』 175

円マークの由来 181

12 経済学 4 大コレクション————— 187

社会科学と蔵書 188

メンガー文庫とセリグマン・コレクション 190

集書の鬼・フォックスウェル 193

ゴールドスミス・ライブラリー 199

クレス・ライブラリー 207

1

ポリティカル・エコノミー

A N
I N Q U I R Y
I N T O T H E
P R I N C I P L E S O F P O L I T I C A L O E C O N O M Y :
B E I N G A N
E S S A Y O N T H E S C I E N C E
O F
D o m e s t i c P o l i c y i n F r e e N a t i o n s .

I N W H I C H A R E P A R T I C U L A R L Y C O N S I D E R E D
P O P U L A T I O N , A G R I C U L T U R E , T R A D E , I N D U S T R Y ,
M O N E Y , C O I N , I N T E R E S T , C I R C U L A T I O N , B A N K S ,
E X C H A N G E , P U B L I C C R E D I T , A N D T A X E S .

By Sir JAMES STEUART, Bart.

On travail quelquefois peut-être avec dessein. Hon. Lib. 1. Ser. 1.

I N T W O V O L U M E S .

V O L I

L O N D O N :
Printed for A. MILLAR, and T. CADELL, in the Strand.
MDCCLXVII

ステュアート『経済学原理』1767年刊

1 名前というもの

名は体をあらわすという。その言句のもつ深い意味はわからないまでも、とにかく事物につける名前・称呼はその実体にふさわしいものであってほしい。だが、「名前がなんでしょう (What's in a name?). バラの花をどんな名前でも呼んでも、甘い香りに変わりはないのに」(『ロメオとジュリエット』第2幕第2場) とシェクスピーアー W. Shakespeare がジュリエットの口をかりて名セリフをはいているように、人はともすれば、実体そのものよりも名前に左右され、名前に惑わされ、名前にこだわり、名前から実体を想像し推量しがちである。それだけに人はわが子の名前のつけ方に苦慮呻吟するわけである。賢太郎とか美子といったたぐいの名前が、往々にしてそれとは正反対の人物についていて、いわゆる名前負けしている人の多いゆえんである。

名称の決定にはこのように人は苦心するのであるが、私の記憶に間違いなければ、1936年7月に、アメリカのマクミラン社からミッチェル M. Mitchell の有名な作品 *Gone with the Wind* が1037ページの定価3ドルで出版・発売された。初版1万部。その2カ月後には2カ所の印刷工場で24時間操業による増刷。2年連続のベストセラー首位。最近でも年に、ハードカバーが2万5000部、ペーパーバックが25万部も出るという。とにかくこれはすごい売れゆきというほかない。

原本の話はさておくとして、その初版刊行の2年後にあたる1938

(昭和13)年には、早くもその日本語訳が現われた。『風と共に去りぬ』との題名で三笠書房から出された大久保康雄の手になるものがこれである。ところがそれと前後して、同じ原本が阿部知二訳編『風に散りぬ』(昭和13年・河出書房)、深沢正策訳『風と共に去る』(昭和13~14年・第一書房)、藤原邦夫訳『風と共に去れり』(昭和14年・明窓社)との題名のもとにつぎつぎと翻訳・発売された。原タイトルに対してつけられた翻訳タイトルは、動詞「去る」の活用形を見せつけられている感もする。しかしそれぞれの訳名にはそれぞれのもち味があり、名訳の部類に入ろうが、同じ原タイトルの翻訳でありながら、その訳出の微妙な違いが、学生のころの筆者にも不思議だと感じられた記憶もあるほどに、それぞれの訳本の売れゆきに相当な影響を与えたようである。他のものが風と共に散り去ってしまったのに、大久保訳だけは風と共に去るどころか、オットどっこい、ベストセラー、ロングセラーとして今なお健在である。そうだとすれば、タイトルの決定もあだやおろそかにはできないということになる。

ベストセラーといえば、くる日もくる日もパンのようによく売れたと語り草になっている『英語に強くなる本』(岩田一男著)という題名の書物のあったことは有名な事実である。このタイトルの生みの親である出版社の社長は、書名イコール宣伝という信念でタイトルに全神経を集中し、上記の書名決定にあたって、『英語の学び方』『英語学習法』の類はまったく月並みで話にならず、『英語が強くなる本』でも『英語の強くなる本』でも駄目であり、それらに対して、努力なしに楽しみながら英語が上達するという印象を与えるには、必ず『英語に強くなる本』でなければならぬと語っていたこと

がある。テニヲハのもつ感覚への繊細な作用にまで神経を使ったこの題名決定が成功の一因となったわけである。このように「の」「が」と「に」のほんのわずかな助詞1字の違いだけにすぎないにもかかわらず、名前というものは、それほどまでに重大な意義・作用をもつものであることをこの事実が物語っている。枕はこれくらいにして本題に入る。

2 命名の苦心

学問の名称は、書物のタイトルとは違い、人気とか売行きを気にする必要はない。とはいっても、学問内容を示すにふさわしい名称であってほしいことはいくまでもない。われわれの学問の名称は経済学 Political Economy という。しかしこの学問は最初から Political Economy とよばれていたわけのものではない。経済学は西欧、とくにフランスやイギリスで形成され、イギリスで開花・結実したものである。後にのべるように、イギリスにおいて、経済学は15世紀ころから重商主義時代いっぱいにかけて、その時々の経済的政策・事件をめぐる見解・批判・論駁・論評を中心とした具体的・即物的な時論・政策論をその主要内容とするものであった。現在の経済学は、その中から徐々に理論的な考察とその体系化がすすめられ、18世紀中ごろに科学として結実したものの発展的成果である。科学としての経済学の成立という事態の進行に対応して、利子とか地代とか貨幣といった個別的具体的な理論的研究を包摂する全体的総括的な概念としての経済に当たる言葉の必要性が徐々に出てきた。

この要求にこたえる言語として煮つまってきたもののひとつがトレード trade である。トレードの現在における意味は商業・取引・貿易・小売業等、つまりいわゆる流通過程の活動に限られる内容のものである。しかし「トレードとは商品の生産・集荷・分配および交換のことである」(W. Petty; *Petty Papers*, ed. by the Marquis of Lansdowne, 1927), 「トレードとは商品をつくること, そしてある種の商品を他の種の商品に対して売ることをいう」(N. Barbon; *A Discourse of Trade*, 1690), 「国内のトレードの全項目は2つの簡明で, ありふれた用語である生産と商取引のうちに十二分に包括される」(D. Defoe; *A Plan of the English Commerce*, 1728)との諸定義が如実に物語っているように, 17, 18世紀のイギリス社会におけるトレードの用語法は, 流通過程の活動とともに生産過程の活動も含むものであったことが明らかとなる。日本語での「ご商売は」という, その商売に近く, トレードの意味の範囲は今日の経済のそれと同じものといってよい。経済学書コレクターとして有名なフォックスウェル H. S. Foxwell が, 経済学の体系についての最も早い書物のひとつとして高く評価しているもののタイトルも I. Gervaise; *The System of Theory of the Trade of the World*, 1720 となっているのもそのゆえである。このように経済と同様に広い守備範囲をもった概念としてのトレードの用法の現在におけるなごりは, trade union (労働組合), trade cycle (景気循環) 等に見出される。俚諺 “Jack of all trade, master of none” (多芸は無芸) もその1例であろう。

トレードと同時期に全く同様に用いられたもうひとつの言葉にコマース commerce がある。今日では商業という限定された範囲に

だけ用いられるコマースも、重商主義期にはトレイド同様に、全産業をカバーする言葉として用いられていた。その適例は、イギリス経済全般を考察したダニエル・ディフォー D. Defoe の著書のタイトル——先に引用したが——*A Plan of the English Commerce* これであろう。したがって、当然のことながら、トレイドとコマースとは同義語として用いられ、さらにこの2語を重ねることによって、経済の意味を人々につよく訴えることも試みられた。アダム・スミス A. Smith の『諸国民の富』(*Wealth of Nations*, 1776) に結晶する新しい経済学の勃興をつげるものとしてのポッスルスウェイトの『経済学総辞典』(M. Postlethwayt; *The Universal Dictionary of Trade and Commerce*, 1751) のタイトルがこの例であろう。ちなみに、彼がこの辞典作成にあたって、種本同様に活用したといわれるもののタイトルは、J. Savary; *Dictionnaire universel de commerce*, 1723 である。

トレイド、コマースがこのように経済を意味するための言葉として用いられたということが事実であったにしても、時の流れとともに、そのいずれもが、現在での意味つまり商業・取引・貿易といった流通現象だけをカバーするものとして用いられるようになり、経済を意味するものとしては用いられなくなってしまったことも事実である。しかしこの2語が脱落したにもかかわらず、生き残った言葉がある。イコノミ Economy これである。

3 ポリティカル・エコノミーの出現

イコノミという言葉にはひとつの先天的な欠陥・弱点がある。こ